「化学工学年鑑2024」の発刊にあたって

佐藤　剛史 *

「化学工学年鑑で秋の到来を感じる」という方も多いのではないでしょうか？今年度も恒例の化学工学年鑑を学会員の皆様にお届けいたします。年鑑は，本学会の学問分野を代表する14部会に関する研究開発動向に，化学産業界全体の動向も加えた内容にて構成されております。各項目とも，基本的に最近1年間の動きに関して掲載する方針で執筆されており，広範囲の分野について速報性をもって伝える特長があります。近年注目されているグリーントランスフォーメーション（GX）等の社会要請への対応状況のみならず，化学工学の各分野を着実に紹介することで，今後のイノベーションの種も知ることができます。この場をお借りし，執筆者をはじめ年鑑編集関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は昨年4月より化工誌編集副委員長を拝命しております。今年で第88巻となる伝統ある学会誌に携わるという緊張感もありましたが，藤井重孝編集委員長のもと，部会・支部・企業・学生会員のカテゴリーから選出された計50名の編集委員の温かいご協力を得て化工誌編集に携わっております。編集委員会の主な業務は，各号最初の所に掲載している特集の編集です。特集では，今注目されている技術や今後重要性が増すと予想される技術，時には教育的に重要である内容など，少し先を見据えて内容を練り上げます。それ以外に，学会員の学びとなるような連載や各種コラムの編集もあります。COVID-19パンデミックを経て，編集委員会の開催方法も変化しました。以前私が編集委員であった際には対面会議のみで，編集会議が東京で行われる性質上，編集活動は関東圏の委員中心となりがちでしたが，オンライン・（ようやく昨年度から可能となった）対面とオンラインのハイブリッド会議の導入により，全国の委員の方が確実に編集活動に参加できるようになったのは大きな進化だと感じています。

先日，研究室を整理したところ，28年前（1996年）のB5判の化工誌第60巻2号が出てきました。特集は「相が変わる・相を変える」で，当時の卒業研究に関連した内容でした。私にとってはこの冊子がまともに読んだ初めての学会誌だと思います。この時はまだ本学会に未入会で，先輩が読まずに放置していたものをありがたく拝借したことが思い出されます。

内容を確認すると，特集の他にインターネット活用法や私のコンピュータ利用法などの記事が掲載されており，Webでの情報発信が発展する前夜の様相を呈しています。さらに，1/2ページ広告の形での編集委員会からの宣伝欄があり，「投稿をお待ちしています！！」と様々なトピックへの投稿案内があり驚きました。当時は情報発信の手段が限られ，化工誌を通じた情報発信が盛んに行われていたことが伺えます。

現在は，当時と比較して情報発信の仕方も大きく変わりました。もはや化工誌のみが唯一の情報源ではなくなり（第82巻10号の巻頭言），Webが主流な情報発信の場となっている中で化工誌の存在意義を考える必要があります。世間のサービス形態も当時から大きく変化しました。現在，サブスクが各種サービスの主流となりつつありますが，考えてみれば本学会も定額会費（一部例外あり）で利用できる巨大なサブスクです。学会員が利用できるサービスは，化工誌の入手，学会発表の権利，資格試験受験資格が有名どころかと思いますが，実際には，本学会には部会・地方支部・各種委員会など多くの組織があり，それぞれが学会員サービスに資する様々な活動を積極的に進めております（本会HP：化学工学会について＞組織図を参照）。この本学会のポテンシャルが，学会員の皆様に十分に周知されているとは言えません。化工誌は他のサービスの入口として，学会員と様々な学会活動を結び付けサービス利用を促すことで，本学会発展に貢献する役割を持っています。

そのために何よりも大切なのは，本誌を読者に楽しんでいただくことです。現在の化工誌編集のキーワードである「持続的発展」と「より親しみやすく愛読される誌面へ」（第87巻10号の巻頭言）を目指し，特集紹介も行いながら各種組織との連携も進めつつ，学会員がもっと学会を身近に感じることのできる化工誌に向けた編集活動を進めて参ります。

ちなみに28年前の編集委員会からの宣伝欄は，「本誌は会員皆様の会誌です。」と結ばれています。このことこそ，時代に関わらず不変である化工誌の本質であることを改めて認識した次第です。学会員第一を守りつつ時代に合わせた化工誌アップデートのために，アンケート，あるいは編集委員とのちょっとした会話からで構いませんので，学会員皆様からの様々な声を編集委員会にお寄せいただければ幸いです。

＊宇都宮大学工学部基盤工学科 教授，令和5・6年度化工誌編集副委員長

著作権法により無断での転載等は禁止されています